

## 禅寺と水墨画

自らの研究テーマである、雪舟とか雲谷派には水墨画作品が多く、水墨画をしょっちゅう見えています。雪舟作品は自分では購入できる物ではないので写真とにらめっこするのだが、雲谷派作品は廉価なものも多いので、買ってきて床の間があるのでそこにつるしたりして眺めたりしているわけです。それらの作品は多くが墨で描かれていて、時には彩色が加えられているものもあるわけですが、基本は墨で描かれているわけです。

それで水墨画といっているのですが、水墨というのはどういう意味なのかなんて考えたりするわけで、辞書には墨と水なんて説明がある。墨は水があってそこで磨るから使えるようになるのであって、絵を描けるのであって、水墨画なんて呼ぶ必要は無いように思われる。だから辞書には水墨画の説明に、すみえなんて書いてあるのです。墨画なんて書くこともある。しかし水墨画すなわち墨絵としてよいのか、墨画としてよいのか。この水という字が付いている意味はないのか、是を考えるのです。

墨を磨ってどれだけ磨るかによって、また磨った物にどれだけ水を入れるかによって、当然墨の濃淡は異なってくる。絵描きはどう濃淡を使うかを考えるわけです。私たちは濃墨、中墨、淡墨なんていったりします。しかしこの三墨色だけでなく色々と濃淡をつけて描くことが出来る。これは彩色についてもおなじではあるけれど、これは水の問題である。ですから墨だけでなく水も付けて水墨と呼ぶのはよいのであろうと思います。描法の一つに「たらし込み」というものがあります。面として墨を塗って乾かないうちに違う濃度の墨などを垂らすとさっと広がる、意図しない広がりを見せる、その偶然を尊ぶ、それがたらし込み。このように墨の表現は多様であるけれども、一方で墨に五彩ありという言葉もあります。五彩は色之三原色赤青黄と白黒。ということはすべての色を表現できるということ。これは実際の色を表現するということではなく、心理的な物。色々な色を感じることができるといふこと。ということで、水墨画は墨のこの表現の豊かさを示しているので優れているということになります。

墨線で描いた絵というのはかなり早くから描かれていたのです。日本でも正倉院の御物のなかにそういったものがある。しかし線だけではなく墨面を使う、墨を塗るといった方がよいけれど、そういった絵は中国では唐時代（8世紀ころ）からとされています。日本では鎌倉時代に宋元絵画の影響下水墨画が描かれるようになる。この時期は中国僧の来日や日本僧の留学などがあって中国の山水画が多くもたらされ、その影響か日本の絵師も水墨画を多く描くようになりました。明兆・如拙・周文・雪舟などが優れた作品を残しています。中国の牧谿、玉澗は禅僧であり、日本の周文や雪舟も禅僧でこのことから禅と水墨画の結びつきはなんとなくわかっていただけなのでしょう。明兆も東福寺の僧かと思われま

この水墨画について、倉澤行洋先生先生は『対極 桃山の美』のなかで、彩色画この本の場合桃山時代の作品を取り上げられているので、金碧画とか濃彩画と書いておられるが、水墨画と濃彩画を比較して、「金碧画でなくても濃い色彩を用いた絵はす墨画に比して、平板で奥行きが浅い感じのすることが多い。だいたいここで平板とか奥行きが浅いというのは、画面構成上の遠近法のことを言うのではない。精神的奥行きが浅いということである。……作画を通しての实在の深處への参入を志す場合には、たいてい色彩を捨て、水墨画を描くことになる。」と書いておられます。確かに色彩という物は感覚を刺激する

のであってそれはそれなりの美をもたらすので、芸術のあり方として認められる物でしょう。先生の場合、実在の深處への参入としては、水墨画の場合においてより行われやすいのであって、濃彩画でそれが起こらないとは考えてはおられないこともいっておきたいと思います。実在の深處とは、自己本来のあり方といったもの。久松真一先生の言葉では「根源」といわれているものです。「本来の面目」「真の自己」「無相なる自己」とも言い換えられています。

水墨画の場合感覚の働きをできるだけ弱めて精神の沈潜をしやすくするといったことが考えられるのです。そして心の変化をもたらすといったことが起こるように考えられます。こういった感覚性よりも精神性の重視といったものは日本の歴の中では、鎌倉時代から室町時代に強まったのではないかと考えられます。この時代は日本で禅宗が大いに広がっている時期です。そういったものと禅とが何らかの関係があると考えられることができます。くわえて周文や雪舟といった禅僧達が水墨画を描いているわけで、禅と水墨画の結びつきはあると考えなければおかしいと思います。

先ほど自己本来といったが、本来の自己をもとめるのは禅の本質であり、座禅はそのためのものです。そして久松先生によると根源それ自体が躍り出てくることに禅の本質があるといっておられます。このように見てくると水墨画と禅が結びつくのは必然であるように思われます。

さきに墨に五彩ありとされるといいましたが、久松先生は「頓悟の禅は、一や無相に向かう方向にあるのではなくして、一や無相が主体としてはたらくところにあるのであります。水墨画は墨色をもって五彩を兼ねると言われる如く、一色の中に多色を含蔵するところに禅と契合するところがあるのであります」とも言っておられます。

ただ一方で次のような言葉もある。これは本居宣長の『玉勝間』のなかの言葉ですが、「墨絵といふはただ墨をべたべたと書て、筆数すくなくよろずとことそぎて、かろがろとかきてその物と見ゆる。こはただ筆の力いきほひを見せたる物なれば、至りて上手のかけるは、げにかうも書くべしと覚えて見どころあるもあれど、おしなべて絵師のかけるは、見どころ無く心づきなきものなり。さるを世の人、ただ此墨絵をことにいみじきことにしてめずるは、世のならひにしたがふ心にて誠にはみどころなきものなり。近き世に茶の湯といふわざ好むともがらなど、殊にこの墨絵をのみめでて、さいしき絵はすへてとらず。」

このような宣長の否定的な言葉はあるけれども、宣長は全否定をしているのではなく、水墨画として極めて安直に描かれた絵も多いという批判であって、優れた水墨画を否定しているのではないのです。

そこで禅寺を見た場合、客殿に描かれた障壁画は多くの場合水墨画であることが多いといえます。妙心寺の天球院の障壁画これは狩野山雪の作品とされているが、これは彩色画でそれかなり華やかな彩色画ではあるけれど、これは少ない。ただし近代に入って描かれた障壁画には彩色画、それも派手な彩色画もあります。これを見ると感覚的に悪くいうとかき回される、落ち着かないという状況に陥る。これでいいのかという気にもなります。幸いこの瑞泉寺では障壁画がないので、落ち着いて話が出来ました。